

朱子の理氣論

青木晦藏稿

第一章 叙 說

第一節 理氣說淵源一

朱子の宇宙に關する思想は其他に於ける學說と同じく朱子獨創の說にあらずして、古來相傳はれる思想を大成したるものなり。今その大成の組成分子となれるものを見るに、孔子の易傳に於ける太極説は勿論、周濂溪の太極圖説に關する思想、及び邵康節の先天易の思想と二程子の理氣に關する思想との如きは、その最も主要なるものゝ如し。然るに朱子は古來の傳説そのまゝを取れるにあらずして、能く諸家の説を融會貫通して以て之を大成したり。是れ朱子の朱子たる所以なり。

(一) 孔○子○の○太○極○説。今孔子の思想の中に於て朱子の理氣論の根據となりしものを見るに、その主要なるものは周易の繫辭に見えたる太極に關する説なり。孔子の言ふ所に據れば左の如し。

易有_二太極_一。是生_二兩儀_一。兩儀生_二四象_一。四象生_二八卦_一。(周易繫辭上傳)

此に所謂太極とは宇宙の實在を指したるものにして易とは宇宙の變易を意味す。蓋し宇宙現象の

變易已まざる中に變易をして變易たらしむる所以の不易の實在あり之を名づけて太極と云ふ。而して宇宙に於ける一切の現象は太極の顯現に外ならざるものなり。朱子は此の理を説いて

易者陰陽之變。太極者其理也。(周易本義通釋卷五、三十頁)
と云ひ、更に之を解釋して

易有_二太極_一。便有_二箇陰陽_一出來。陰陽便是兩儀。兩儀生_二四象_一。便是一箇陰。又生_二出一箇陽_一。是一象也。一箇陽又生_二一箇陰_一。是一象也。一箇陰又生_二一箇陰_一。是一象也。一箇陽又生_二一箇陽_一。是一象也。此謂_二四象_一。四象生_二八卦_一。是這四箇象。生_二四箇陰_一時。便成_二坎震坤兌四卦_一。生_二四象陽_一時。便成_二巽離艮乾四卦_一。(朱子語類卷七十五、十九頁)

と云へり。而して漢唐時代に在りては太極を以て氣と爲して一も理と爲すものあらず。故に漢書律歷志には

太極元氣。函_レ三爲_レ一。

太極中央之氣。故爲_二黃鐘_一。

と云ひ太極を以て天地人の三箇の形氣已に具はりて渾淪未だ判れざる物と爲せり。鄭玄の如きも此の思想と同一なるを以て

太極者。極中之道。淳和未_レ分之氣也。(經訓比義卷上)

と云ひ、孔穎達亦此の思想を繼承して

太極謂天地未分之前。元氣混而爲一。卽是太初太一也。(周易正義卷七、二十八頁)

と云ひ皆太極を以て氣と爲すにあらざるものなし。然るに此れ古代の儒學に於て然るのみにあらずして莊子の如き亦太極を以て氣と爲せり。その言に

夫道有_レ情有_レ信。無_レ爲無_レ形。可_レ傳而不_レ可_レ受。可_レ得而不_レ可_レ見。自本自根。未_レ有_二天地_一。自古以固存。神_レ鬼神_レ帝。生_レ天生_レ地。在_二太極_一之先。而不_レ爲_レ高。在_二六極_一之下。而不_レ爲_レ深。

(莊子大宗師第六)

と云へるものは是れなり。然るに朱子が全く此等の説に従はずして太極を以て理と爲し、「太極只是一箇理字」と喝破したるが如きは千古の卓見と云はざるを得ず、此の他孔子の言にして朱子の説の根據となれるものに

形而上者謂_二之道_一。形而下者謂_二之器_一。(易繫辭上傳)

の言あり。朱子の説に據れば道とは卽ち太極を指したるものにして道體の至極を語れば之を太極と云ひ、太極の流行を語れば之を道と云ひ、二名ありと雖も初めより兩體あるにあらずとせり。而して器とは陰陽の氣を指したるものと爲し、太極なる道は無形無象なるを以て之を形而上と爲し、陰陽なる氣は形象の見るべきものあるを以て之を形而下となせり。故に朱子は

卦爻陰陽。皆形而下者。其理則道也。(周易本義通釋卷五、三十三頁)

形而上者。指理而言。形而下者。指事物而言。事々物々。皆有其理。事物可見。而其理難知。即事即物。便要見得此理。(朱子語類卷七十五、廿五頁)

と云へり。而して周濂溪が太極を以て無極と爲したるは蓋し此の形而上者謂之道に本づきしものなるべく、又朱子が太極を以て無形無象の理と解したるも亦實に此れに本づきたるものなるべし。又孔子が

一陰一陽之謂道。繼之者善也。成之者性也。(易繫辭上傳)

と云へるも亦朱子の説の根據となれるものにして朱子は之を解釋して左の如く云へり。

陰陽迭運者氣也。其理則道。(周易本義通釋卷五、十一頁)

一陰一陽之謂道。陰陽是氣不是道。所以爲陰陽者乃道也。若言陰陽之謂道。則陰陽是道。今日二陰一陽。則所以循環者乃道也。(朱子語類卷七十四、廿二頁)

而して孔子の此の説はもと宇宙の實在と人生の實在との關係を説けるものにして、宇宙に於ける一陰一陽する所以の道は人物に賦與せられてその性を成すものなるを以て、道と性とはもと同一體の存在と云はざるべからず。是れ朱子が

這箇理在天地間一時只是善。無有不善者。人物得來方始名曰性。只是這箇理。在天則曰命。

在_レ人則曰_レ性。性便是善。(周易折中卷十三、廿二頁)

と云へる所以なり。故に朱子より見れば此の説は論語に所_レ謂性與_三天道_一の關係及び易の象傳に所謂大哉乾元。萬物資始。乾道變化。各正_三性命_一とも同一の意を説けるものにして、宇宙の道の人に在るものを性と云ひ、人の性の宇宙に在るものを道と云ふ其の實同一なるなり。故に朱子は

性者人所_レ受之天理。天道者天理自然之本體。其實一也。(論語集注卷之一)

一陰一陽。此是天地之理。如_三大哉乾元萬物資始_一。乃繼_レ之者善也。乾道變化。各正_三性命_一。此成_レ之者性也。這一段是說_下天地生_三成萬物_一之意_上。(朱子語類卷七十四、廿三頁)

と云へり。而して文言傳に説く所の元亨利貞に關する解釋の如きも亦朱子が宇宙生々の理を説く根據となれり。文言傳に云ふ。

元者善之長也。亨者嘉之會也。利者義之和也。貞者事之幹也。

朱子に據れば太極は生々の理にして渾然たる一體のものなれども之を分てば元亨利貞となる。而し此の理の人に與へられたるものを仁義禮智と云ふ。故に仁義禮智は人に存する生々の理なり。その言に

元者生物之始。天地之德。莫_レ先_三於此_一。故於_レ時爲_レ春。於_レ人則爲_レ仁。而衆善之長也。亨者生物之道。物至_三於此_一。莫_レ不_三嘉美_一。故於_レ時爲_レ夏。於_レ人則爲_レ禮。而衆美之會也。利者生物之遂。

物各得_レ宜。不_二相妨害。故於_レ時爲_レ秋。於_レ人則爲_レ義。而得_二其分之和。貞者生物之成。實理具備。隨_レ在各足。故於_レ時爲_レ冬。爲_レ人則爲_レ智。而爲_二衆事之幹。(周易本義通釋卷七八、一頁)
とあるは即ち是の理を説けるなり。此れに據れば孔子が易に於て述べられたる説は朱子によりて新しき解釋を加へられ、而もその説は朱子の理氣論の根據となり、その宇宙觀を構成する一分子となれることは疑ふべからざる所なり。

(二)周子の太極說 孔子の後に於てたる學者の説の中に於て朱子の理氣論の根據となれる最も主要なるものは、近世に於ける周濂溪の思想なり。周濂溪の著書に太極圖説及び通書ありて太極圖説は朱子に與へたる影響甚だ大なるものあり。今周濂溪の宇宙觀に就て考察するに左の如し。

無極而太極。」太極動而生_レ陽。動極而靜。靜而生_レ陰。靜極復動。一動一靜。互爲_二其根。分_レ陰分_レ陽。兩儀立焉。」陽變陰合。而生_二水火木金土。五氣順布。四時行焉。五行一陰陽也。陰陽一太極也。太極本無極也。」五行之生也。各一_二其性。無極之眞。二五之精。妙合而凝。乾道成_レ男。坤道成_レ女。二氣交感。化_二生萬物。萬物生々。而變化無_レ窮焉。(董榕周子全書卷一、五頁至二四頁)

朱子は太極圖説及び通書の二書に對しては太極圖説解及び通書解を著はして以て周濂溪の意の在る所を闡明したり。孔子は易有_二太極と云へるのみにして未だ嘗て太極の無極なることを言はれたることなし。然るに周濂溪は無極の二字を加へて以て太極の意を明かにせり。是に於て陸象山の如き

は無極の二字は老子より出でたるものにして儒學本來の思想にあらずと爲したるにも拘はらず。朱子は之に反對してたとひ無極の二字は老子に出でたりとするもその意味を異にするものにして、太極の聲もなく臭もなき妙理なることを形容したるものなりと爲し、左の如く説けり。

上天之載。無聲無臭。而實造化之樞紐。品彙之根柢也。故曰無極而太極。非太極之外。別有無極一也。(周子全書卷一、五頁)

是れ朱子の加へたる新解釋にして周子の意を發明したるものと云はざるべからず。而して周子は無極而太極と云へるのみにして未だ嘗て太極を以て理なりとも氣なりとも明言したることあらず。然るに朱子が周子の太極を以て無極なりと云へる言によりて之を推し「太極只是一箇理字」と解したが如きは古人未だ嘗て言はざる所にして朱子の新解釋と認むべきものなり。後世に至り此の解釋に對して異議を挾むものなきにあらざるも、未だ以て朱子の解釋を破るに足らず。周子は又太極なる理と陰陽なる氣との關係に就ては上文擧ぐる所の如く

太極動而生陽。動極而靜。靜極復動。一動一靜。互爲其根。分陰分陽。兩儀立焉。

と云へり。朱子は之を解釋して太極を以て陰陽動靜する所以の理と爲し、陰陽動靜の現象は太極なる理より顯現したるものと見て、理と氣とは二にして一、一にして二なるものと爲せり。而して此の説は易の一陰一陽之謂道と思想の聯絡あるものゝ如し。故に朱子は之を説いて

太極之有_二動靜。是天命之流行也。所謂一陰一陽之謂_レ道。蓋太極者。本然之妙也。動靜者所_レ乘之機也。太極形而上之道也。陰陽形而下之器也。是以自_二其著者_一而觀_レ之。則動靜不_レ同時。陰陽不_レ同_レ位。而太極無_レ不_レ在焉。自_二其微者_一而觀_レ之。則冲穆無朕。而動靜陰陽之理。已悉具_二於其中_一矣。(周子全書卷一、九頁)

と云へり。周子の説にては太極と陰陽との關係を説くこと精密ならざるものありと雖も、朱子の解釋によりて道の顯微無間にして、體用一源なるの理始めて明晰となれり。而して陰陽なる氣に就いて云へば周子の一動一靜。互爲_二其根_一。は氣の時間的關係をいへるものにして分_レ陰分_レ陽。兩儀立焉。は氣の空間的關係を云へるものなり。蓋し宇宙の現象は時間的關係と空時間的關係とより成れるものにして時空の關係を離れて、現象世界あるなし。朱子は時間的關係を名づけて流行と云ひ、空間的關係を名づけて對待と云ひ、而して流行の方面より見れば陰陽は一氣にして對待の方面より見れば二氣と爲すを得べしとなせり。故に朱子は

動極而靜。靜極而復動。一動一靜。互爲_二其根_一。命之所_二以流行而不_レ已也。動而生_レ陽。靜而生_レ陰。分_レ陰分_レ陽。兩儀立焉。分之所_二以一定而不_レ移也。(同上卷一、八頁)

と云ひ、又

陰陽若論_二流行底_一。則且是一箇。對待底則兩箇。陰陽作_二一箇_一看亦得。作_二兩箇_一看亦得。(同上卷一、十一頁)

と云へり、蓋し陰陽を以て一氣と爲すと二氣と爲すとはその觀察點を異にするより起るものにして決して相矛盾するものにあらざるなり。此等は朱子の解釋によりて始めて明かなるを得たるものにして、朱子の周濂溪に對する功勞は蓋し尠少にあらざるなり。而して周濂溪の説によれば陰陽は生々化々して息まざるものにしてその變合によりて水火木金土の五行なる質を生じ、此の五行の氣質順布して四時行はれ、此れによりて萬物を化生し、萬物生々として變化窮りなきものとせり。

陽變陰合。而生_二水火木金土_一。五氣順布。四時行焉。五行一陰陽也。陰陽一太極也。太極本無極也。五行之生也。各一_二其性_一。

と云へるもの即ち是れなり。此れに據れば宇宙間に於ける萬化萬象は氣質の變合によりて成れるものにして天地の間一物として之を逃るゝものなし。然るに理と氣とはもと一體にして離るゝを得べきものにあらざれば、一事一物太極の具はらざるものなし。故に現象より云へば陰陽の中にも太極あり、五行の中にも太極あり、萬化萬象の中にも太極あらざるなし。然るに本體より云へば太極なる理より陰陽五行萬化萬象なる現象を生ずるものにして太極現象を含むと云ふべし。故に朱子は此の理を説明して

五行具。則造化發育之具。無_レ不_レ備矣。故又即_レ此而推_二本之_一。以明_下其渾然一體。莫_レ非_二無極之妙_一。而無極之妙。未_レ嘗不_レ具_二于一物之中_一也。蓋五行異_レ質。四時異_レ氣。而皆不_レ能_レ外_二乎陰陽_一。

陰陽異位。動靜異時。而皆不能離乎太極。至于所以爲太極者。又初無聲臭之可言。是性之本體然也。天下豈有性外之物哉。然五行之生。隨其氣質。而所稟不同。所謂各一其性也。各一其性。則渾然太極之全體。無不各具於一物之中。而性之無所不在。又可見矣。(周子全書卷一、十八頁)

と云へり。周子の意は此の解釋によりて明かなるを得たるものにして、理には全體を以て云ふものと部分を以て云ふものとあることも此れによりて明かなり。蓋し本體より見れば太極なる理は全體の理にしてすべて太極の理に統べられざるなく、現象より見れば太極なる理は部分の理にしてすべての現象の中に存せざることなし。朱子が一を統體の理と云ひ、一を各具の理と云へるは即ち此の全體の理と部分の理とを云へるなり。

蓋合而言之。萬物統體一太極也。分而言之。一物各具一太極也。所謂天下無性外之物。而性無不在者。於此尤可以見其全矣。(同上卷一、廿二頁)

と云へるもの即ち是れなり。是れ周子未だ發せざるの旨を闡明したるものと謂ふべし。而して朱子が理氣の關係を説明するに不離看不雜看を以てしたるも、もと周濂溪の太極圖に據りたるものにして朱子は理氣を一面より見ては不離と云ひ一面より見ては不雜と云へり。故に云ふ。

○此所謂無極而太極也。所以動而陽靜而陰之本體也。然非有以離乎陰陽也。即陰陽而指

其本體。不_レ雜乎陰陽。而爲_レ言爾。(同上卷一、三頁)

此れ亦朱子の説明を待つて明かなる所にして、圖のみを以てしては何人も其の眞意のある所を理解し得べからざるものあり。之を要するに周子の説はもと簡奥にして是の本意容易に知り得べからざりしが、朱子の説明を得て始めて知ることを得たれば、朱子の思想の周濂溪に負ふ所あると共に周濂溪も亦朱子に負ふ所なしと謂ふべからず。殊に無極而太極を以て無形の理と解し、太極を以て動靜する所以の理と爲したるが如き、統體の理と各具の理に分ち及び不離看と不雜看とに分ちたるが如き皆能く周子未發の蘊を發したるものと謂ふべし。

第二節 理氣說淵源二

(三) 邵子の易說 朱子の理氣論の由りて來れる淵源を探ぐれば易及び太極圖說に負ふ所あるは明かなれども邵康節の先天易の說に負ふ所あるも亦否むべからず。然れども朱子の思想に與へたる影響よりいへば周濂溪の感化は邵康節の及ぶ所にあらざるなり。朱子以爲らく、

先天乃伏羲本圖。非_レ康節所_レ自作。雖_レ無_レ言語。而所_レ該甚廣。凡_レ今易中一字一義。無_レ不_レ自_レ其中_レ流出_上者_甲。太極却是濂溪自作。發_レ明易中大概綱領意思而已。故論_レ其格局。則太極不_レ如_レ先天之大而詳。論_レ其義理。則先天不_レ如_レ太極之精而約。蓋合下規模不_レ同。而太極終在_レ先天範圍之內。又不_レ若_レ彼之自然。不_レ假_レ思慮安排也。若_レ以_レ數言之。則先天之數。自_レ一而二。自_レ二

而四。自_レ四而八。以爲_三八卦。太極之數。亦自_レ一而二。剛自_二二而四。剛善剛惡。柔自_二二而四。柔善柔惡。遂加_三其一。以爲_二五行。而遂下及_三於萬物。蓋物理本同。而象數亦無_三二致。但推得有_三大小詳略_一耳。(朱子文集卷四) (十六、卅三頁)

此れに據れば朱子が邵康節の先天易說に取る所ありしを知るべし。今康節の思想を考察するに康節も亦易に據りて宇宙の實在を名づけて太極と云へり。周濂溪の如く無極而太極と云はざれども太極なる實在が形象なく聲臭なきものにして、一切現象の本體なりと見たることは殆ど周濂溪と同一の考察より出でたるが如し。その言に

能造_三天地_一者太極也。太極者其可_二得而名_一乎。可_二得而知_一乎。故強名_レ之曰_三太極_一。太極者其無名之謂乎。(邵子全書卷七、十七頁)

とあるは即ち是れなり。然るに康節も或は無極と云へることなきにあらず。故に無極之前。陰含_レ陽也。有象之後。陽合_レ陰也。陰爲_三陽之母_一。陽爲_三陰之父_一。(同上卷五、二十頁)と云へり。無極と有象とを相對せしめたる所より見れば、無極は無象の意にして形象なき理を指したること明かなり。而して康節は太極なる語の外に或は實在を稱して道と云へることあり。道爲_三太極_一。(同上卷五、三十三頁)と云ひ、太極道之極也。(同卷六、廿五頁)と云へるが如き是れなり。而して道に就ては左の如く云へり。

一陰一陽之謂_レ道。道無_レ聲無_レ形。不_レ可_二得而見_一者也。故假_三道路之道_一而爲_レ名。人之有_レ行。必由_三乎道_一。一陰一陽天地之道也。物由_レ是而生。由_レ是而成者也。(同上卷六、十七頁)

天由道而生。地由道而成。物由道而形。人由道而行。天地人物則異也。其子由道一也。

(同上卷四、十三頁)

天地と云ひ人物と云ふは現象世界を指し、道は實在世界を指したるものにして、道即ち太極なる實在は宇宙の現象の本體なることを意味し、現象は實在の顯現なることを意味せるを知るべし。而して此の理は左の康節の言によりて之を證することを得べし。

先天之學心也。後天之學迹也。出_三入_三有_三無_三死_三生_三者道也。(同上卷六、二頁)

先天學心法也。故圖皆自_レ中起。萬化萬事。生_三於_三心_一也。(同上卷六、十一頁)

所謂先天とは形象の見るべきものなく聲臭の聞くべきものなき冲漠無朕の體を云ひ、後天とは形象聲臭の見聞すべき現象世界を云へるなり。故に朱子も之を説いて。

太極者象數未_レ形。而其理已具之稱。形器已具。而其理無_レ朕之目。在_三河圖洛書_一。皆虛中之象也。

周子曰無極而太極。邵子曰道爲_三太極_一。又曰心爲_三太極_一。此之謂也。(易學啓蒙通釋卷六、十六頁)

と云へり。蓋し太極なる道は一面より見れば實在なると同時に一面より見れば現象なるを以て、太極は非物非象なると共に物象を包有する統一原理と謂ふを得べし。故に此の點より云へば程子の所謂體用一源顯微無間及び冲漠無朕萬象森然已具と同一思想にして、體より云へば無形無象の存在なれども、森然たる萬象はその中に已に具はりて未發の状態なるが故に、理氣の分つべきものなき渾

然一體の存在と謂ふべし。若し太極が現象の上に超然として存し、現象と別物なれば此れより兩儀を生じ四象八卦を生ずべきものにあらず。此の義に就ては康節の子伯温の説く所その要を得たり。即ち

太極者。在三天地之先。而不爲先。在三天地之後。而不爲後。終三天地而未嘗終。始三天地而未嘗始。與三天地萬物。圓融和會。而未嘗有先後終始者也。有三太極。兩儀四象八卦。以至於天地萬物。因已備矣。非謂今日有三太極。而明日方有三兩儀。後日乃有三四象八卦也。雖謂之曰太極生三兩儀。兩儀生三四象。四象生三八卦。其實一時具足。如下有形則有影。有一則有二有三。以至於無窮皆然。(邵子全書卷三、六頁)

云へるものは是れなり。以上述ぶる所は主として康節の太極に關する見解にしてその大要に於ては周濂溪の説と大に異なるものあるを見ず。更にその現象開展に關する說に就て考察するに、康節の説は主として易傳の思想に本づき現象世界を以て道即ち太極の顯現したるものと爲せり。故に云ふ、

太極既分。兩儀立焉。陽下交於陰。陰上交於陽。四象生矣。陽交於陰。陰交於陽。而生三天之四象。剛交於柔。柔交於剛。而生三地之四象。於是八卦成。八卦相錯。然後萬物生焉。是一分爲二。二分爲四。四分爲八。八分爲十六。十六分爲三十二。三十二分爲六十四。

此に所謂兩儀とは陰陽を指し、四象には天の四象と地の四象とありて太陽太陰少陽少陰を天の四象と爲し、太剛太柔少剛少柔を地の四象と爲し之を合せて八卦と爲す。此等は天地自然の現象に就て云へるものにして易書は之に準據して作らる。而して邵康節の説は又之に本づけるものにして程明道は之を稱して加一倍法なりと云へり。朱子の易學啓蒙亦此れに據る所あるを見得べし。更に康節の天地發展の次第を説けるを見るに左の如く云へり。

天生_三於動_一者也。地生_三於靜_一者也。一動一靜交。而天地之道盡_レ之矣。動之始則陽生焉。動之極則陰生焉。一陰一陽交。而天之用盡_レ之矣。靜之始則柔生焉。靜之極則剛生焉。一剛一柔交。地之用盡_レ之矣。動之大者謂_三之太陽。動之小者謂_三之小陽。靜之大者謂_三之太陰。靜之小者謂_三之少陰。太陽爲_レ日。太陰爲_レ月。少陽爲_レ星。少陰爲_レ辰。日月星辰交。而天之體盡_レ之矣。太柔爲_レ水。太剛爲_レ火。少柔爲_レ土。少剛爲_レ石。水火土石交。而地之體盡_レ之矣。(同上卷三、二頁)

此れに據れば宇宙の現象は體より用に之く所より云へば一より二、二より四、四より八、八より十六、十六より三十二、三十二より六十四となり、無限に發展するものにして、更に用に之く所より云へば六十四より三十二、三十二より十六、十六より八、八より四、四より二、二より一となる。此の一は即ち太極にして所謂一動一靜の間なるものなり。康節は此の如く加一倍の法により進展するものと爲せる所は、周濂溪が陰陽より五行を生じ陰陽五行の變合によりて萬物を化生することを

說けるものと同じからざる所あり。是れその考察の相違のみにして宇宙現象の進展の相違にあらず。而して康節がすべて四を基数とするはその特色と見るべきものなり。又康節も陰陽剛柔に就ては周濂溪と同じく之を分つて流行と對待と爲せるを見る。その言に據るに

本一氣也。生則爲陽。消則爲陰。故二者一而已矣。(同上卷五、二十一頁)

陰對陽爲二。然陽來則生。陽去則死。天地萬物。生死主於陽。則歸之于一也。(同上卷六三頁)
と云へるは是れ陰陽の本來一氣の流行に外ならざることを說けるものなり。然れども一氣の流行たる陰陽も之を分てば陰となり陽となり決して二物と謂ふべく一物と謂ふべからず。故に云ふ。

陽不能獨立。必得陰而後立。故陽以陰爲基。陰不能自見。必待陽而後見。故陰以陽爲唱。陽知其始。而享其成。陰效其法。而終其勞。(同上卷五、廿一頁)

天地定位。乾與坤對也。山澤通氣。艮與兌對也。雷風相薄。震與巽對也。水火不相對。離與坎對也。此伏羲之易也。(同上卷一、五頁)

陰陽動靜はもと一氣の活動に過ぎざるものなれども、陰陽動靜の兩端に就て之を見れば之を分つて二氣と爲すを得べし。蓋し陽の活動はもと陰之が根基となり、陰の靜止はもと陽之が唱を爲し、一動一靜して無窮に連續して已まざるものと謂ふべきなり。然るに康節は此の陰陽動靜の作用の靈妙不可思議なる所を稱して神と云へり。此の思想はもと易の陰陽不測謂之神に本づけるものにして、

朱子の鬼神説の根據となれるものの如し。その言に謂へらく

太極一也。不動生_レ二。二則神也。(同上卷六二十頁)

太極不_レ動性也。發則神。神則數。數則象。象則器。器之變。復歸_二於神_一也。(同上卷六廿一頁)

神とは所謂陰陽二氣の良能を指したるものにして、陰陽を離れて別に神なるものあるにあらず。而して陰陽の存する所必ず此の妙用存し、而もその妙用は一部分に存するものにあらずして宇宙に遍在す。故に康節は又神無_レ所在。無_レ所在と云へり。且陰陽の存する所必ず此の妙用の存するは、もと太極なる實在の主宰するに由るなり。もしその裏面に太極の存することなかりせばその妙用を見るを得べからざるべし。康節の言に

夫一動一靜者。天地至妙者歟。夫一動一靜之間者。天地人之至妙至妙者歟。(同上卷三、三十二頁)

と云へるは此れを謂ふなり。此に所謂一動一靜之間なるものは即ち太極を指す。動靜は氣即ち現象世界に屬するものなれども、太極なる實在は一面より見れば現象の氣以上のものなれば動靜を以て云ふべきものにあらず。然れども他の一面より見れば太極は動靜を離れて別に存在するものにあらず。故に康節は一動一靜之間なる語を以て太極を云へるなり。即ち更にいへば動靜に超越して而も動靜を離れざるの意を著はしたるなり。邵伯温之を解釋して

一動一靜者。天地之妙用也。一動一靜之間者。天地人之妙用也。陽關而爲_レ動。陰闔而爲_レ靜。所_レ

謂一動一靜者也。不_レ役_ニ乎動。不_レ滯_ニ乎靜。非_レ動非_レ靜。而主_ニ乎動靜_ニ者。一動一靜之間者也。自_レ靜而觀_レ動。自_レ動而觀_レ靜。則有_ニ所謂動靜_一。方靜而動。方動而靜。不_レ拘_ニ於動靜_一。則非_レ靜者也。(同上卷三、三十二頁)

と云へるは蓋し父の意を得たるものなるべし。之を要するに康節の思想には多少道家の思想に近き所あるが如しと雖も、もと易の思想より出でたるものにして此の點に於ては周濂溪の思想の易に本づけると異なるものあらず。而して康節の思想中殊に朱子思想の根據となりしものは先天易說なりとす。

(四) 程子の理氣說 邵康節の同時に張橫渠あり。その説は周濂溪及び邵康節と異なり氣一元論にして、理を以て氣中の條理なりと云ひ氣の屬性となせり。故に此の思想は朱子に對して大なる影響を與へざりしものゝ如し。橫渠の同時に程明道程伊川の兄弟あり。此の二子は主として子思及び孟子の思想系統を承けたる人なれば、その主とする所は人生問題に在りて宇宙問題にあらず。然れども程明道の説に

蓋上天之載。無_レ聲無_レ臭。其體則謂_ニ之易_一。其理則謂_ニ之道_一。其用則謂_ニ之神_一。其命_ニ於人_一則謂_ニ之性_一。率_レ性則謂_ニ之道_一。修_レ道則謂_ニ之教_一。……形而上爲_レ道。形而下爲_レ器。須_レ着_ニ如_レ此説_一。器亦道。道亦器。但得_レ道在。不_レ繫_ニ今與_レ後已與_レ人_一。(二程全書卷之一、六頁)

と云へるあり。此れ明道の宇宙觀と見るべきものにして此に所謂道は即ち易に所謂太極と同じく宇宙の實在を指し、器は即ち氣にして所謂陰陽なる現象を指す。その器亦道道亦器と云へる所に據れば明道は理氣は本來一體のものにして分離すべからざるものとなせるなり。朱子が不離看より理氣の一體にして分離すべからざることを説けるは蓋し明道の此の説に本づきしものなるべし。故に朱子の言に云ふ。

形而上者。無形無影。是此理。形而下者。有情有狀。是此器。然有此器。則有此理。有此理。則有此器。未嘗相離。却不_下是於形氣之外。別有所謂理。亘古亘今。萬事萬物。皆只是這箇。所_下以說_中但得道在。不_下繫_中今與_下後已與_中人。(近思錄集注卷一十四頁)

然るに明道は器なる陰陽に就て如何なる見解を有せしかを考察するに、その説く所によれば天地の大徳を生と云ひ天地涸縊して萬物化醇するものなれば、宇宙間の萬物は皆陰陽二氣の交感によりて生々化々するものとなせり。然るに如何にして萬物各其の類を異にするかと云ふに明道は二氣の組織の偏正によるものとなせり。

人與_レ物。但氣有_二偏正_一耳。獨陰不_レ成。獨陽不_レ生。得_二陰陽之偏_一者。爲_二鳥獸草木夷狄_一。受_二正氣_一者人也。(二程全書卷一、五頁)

と云へるもの即ち是れなり。此の説は後來朱子の人と物との相違を論ずる根據となりしものにして

朱子の説は畢竟之を詳細にしたるに過ぎず。然るに明道伊川の二子は周濂溪の太極説及び邵康節の先天象教の學を取らざりし人なれば、太極に關しては一も之を説けることなく、理氣に關する思想の一端を説述したるに過ぎざるのみ。伊川は宇宙の實在はすべての理の根本原理たることを説いて一陰一陽之謂道。道非陰陽也。所以一陰一陽道也。如闔一闔一關謂之變。(二程全書卷三。八頁) 離了陰陽更無道。所以陰陽者是道也。陰陽氣也。氣是形而下者。道是形而上者。形而上者則是密也。(同上卷十五、二十頁)

と云へり。此の説は朱子の太極論の根據となりしものにして、程子は宇宙の實在を以て道と云ひて太極とは云はざりしが、朱子は此の道を以て太極と同一の意味を有するものとして二説を合して一と爲し太極卽道と云へり。然るに伊川の此の説はもと理と氣とを分別して見たるものなれども、理氣を合一して説けるものありて

至微者理也。至著者象也。體用一源。顯微無間。(二程文集卷七、六頁)

至顯者莫如事。至微者莫如理。而事理一致。顯微一源。

と云へり。此に所謂理は即ち上文に引ける所の道に當り太極を指したるものにして宇宙の實在を意味し、而して象と云ひ事と云ふは陰陽を指したるものにして宇宙の現象を意味す。此れに據れば一面より見れば理なる實在は聲もなく臭もなきものなれども、陰陽五行萬事萬物の象已にその中

に具はりて一も缺くる所なく、一面より見れば陰陽五行萬事萬物の象に即いて理なる實在在らざる所なきなり。伊川は此の理を説いて左の如く云へり。

冲漠無朕。萬象森然已具。未_レ應不_レ是先。已應不_レ是後。如_レ百尺之木。自_レ根本_レ至_レ枝葉。皆是一貫。不_レ可_レ道_下上面一段事。無_レ形無_レ兆。却待_レ人旋安排。引入來教_レ入_レ塗轍。既是塗轍。却只是一箇塗轍。(二程全書卷十六、十四頁)

是れ朱子の所謂此一段只是說_レ無極而太極_二ものにして未_レ應は寂然不動の時。已應は感じて遂に通ずるの時を云ふ。蓋し現象となり現はるべきの理は悉く本體未應の時に具足して一も缺くる所なし。故に體に即て用その中に在り先後を以て分別し得べきものにあらず。是れ朱子の所謂太極自是涵_レ動靜之理_一と同じく現象の理も現象の氣も皆實在なるの中に包涵せられたるの理を説けるものなれば伊川の説は畢竟理一元論と云はざるべからず。

以上述ぶる所は伊川の理に關する思想なり。而してその氣に關する思想に就て考察するに伊川は宇宙には恒久不變の理の行はるゝと共に常に生々變化して已まざるものと爲して、

天地之理。終而復始。所_レ以恒而不_レ窮。恒非_レ一定之謂_レ也。一定則不_レ能_レ恒矣。惟隨_レ時變易。

乃恒道也。天地常久之道。天下常久之理。非_レ知_レ道者_一。孰能識_レ之。(近思錄集注卷一、十頁)

動靜無_レ端。陰陽無_レ始。非_レ知_レ道者_一。孰能識_レ之。(同上卷一、十二頁)

と云へり。此等は宇宙の現象世界に於ける理及び氣を説けるものにして、朱子が陰陽の流行して已まざるを説けるが如きは蓋し此思想に本づけるなり。故に朱子は

動之前有_レ靜。靜之前又有_レ動。推而上_レ之。其始無_レ端。推而下_レ之。以至_三未來之際_一。其卒無_レ終。動靜無_レ端。陰陽無_レ始。天道也。始_三於陽_一成_三於陰_一。本_三於靜_一流_三於動_一。人道也。然陽復本_三於陰_一。靜復根_三於動_一。其動靜亦無_レ端。其陰陽亦無_レ始。則人蓋未_三始離_三乎天_一。天亦未_三始離_三乎人_一也。

(同上卷一、十二頁)

と云へり。而して伊川は宇宙の現象に於ては感應自然の理の行はるゝと共に天地に心ありて流行活動するものと爲せり。その言に

有_レ感必有_レ應。凡有_レ動皆爲_レ感。感則必有_レ應。所_レ應復爲_レ感。所_レ感復有_レ應。所_三以不_レ已也。感通之理。知_レ道者默而觀_レ之可也。(同上卷一、十頁)

とあるは是れ感應自然の法則を説けるものにして佛教に所謂因果律なるものとの意を同じうす。而してその言に

一陽復_三於下_一。天地生物之心也。先儒皆以_レ靜爲_レ見_三天地之心_一。蓋不_レ知_三動之端_一。乃天地之心也。非_三知_レ道者_一孰能識_レ之。(同上卷一、九頁)

とあるは是れ天地の有心を説けるものにして此の二説は矛盾するものゝ如くなれども、靜止的のも

のが活動の端を開く所は有_レ心の如く見ゆるのみにして、其實宇宙の大理法たる實在より見れば皆法則によりて活動するものと見るを得べきなり。

以上述ぶる所に據れば孔子の易説は一は周濂溪の太極圖説となり、一は邵康節の先天易説となり一は二程子の理氣説となり、その詳細の所に至りては多少の相違あるを免れずと雖も、その大要に至りては其の指を一にす。而して此等の學説は朱子に至りて全く融洽せられて一家の説を構成するに至れり。若し朱子の出づるなくんば此等の説は統一する所なくして終るを見るべし。朱子の斯學に於ける功勞の大なるは蓋し此ここに在りて存す。

第二章 實 體 論

第三節 無 極 の 理

余は上節に於て朱子の理氣説の由りて來れる淵源を明かにしたれば、是より更に朱子によりて大成せられたる理氣説を分つて實體論、現象論及び理氣觀の三章に分つてその大要を述べべし。而して此れに就ては先づ太極なる理の意味を述べて漸次その他の問題に及ばざるべからず。

(一)太極の意。今太極の意義如何を考察するに朱子の説に據れば太極は宇宙の實在を意味するものにして、天の萬古常に運る所以、地の萬古常に存する所以、人物の萬古生々として息まざる所以

のものは、すべて宇宙の實在たる理の主宰によらざるなく、而してその理は渾然たる一體の存在にして、最上至極以て何物も之に加ふべきものなきを以て太極と名づく、故に太極は理體の尊號と云ふを得べきものなり。朱子は此の意味を説いて

太極者如_二屋之有_レ極。天之有_レ極。到_二這裏_一更沒_二去處_一。理之極至者也。(朱子語類卷九十四、十一頁)

聖人之意。正以_二其究竟至極_一。無_二名可_レ名_一。故特謂_二之太極_一。猶_レ曰_下舉_二天下之至極_一。無_中以加_レ此云爾。極者至極而已。以_二有形者_一言_レ之。則其四方八面。合湊將來。到_二此築底_一。更無_二去處_一。從_レ此推去。四方八面。都無_二向背_一。一切停勻。故謂_二之極_一耳。至_二於太極_一。則又初無_二形象方所_一之可言。但以_二此理至極_一。而謂_二之極_一耳。(朱子文集卷三十六、九頁)

と云へり。而して易の大傳に宇宙の實在を名づけて太極と云へる意味も亦此れに外ならざるべし。然るにその當時陸象山は太極を以て理と爲すことは朱子に異なる所なしと雖も、極を訓して中と爲し太極を以て大中の義と爲し以て朱子に反對して以爲らく

極亦此理也。中亦此理也。五居_二九疇之中_一。而曰_二皇極_一。豈非_下以_二其中_一而命_レ之乎。民受_二天地之中_一以生。而詩言立_二我烝民_一。莫_レ匪_二爾極_一。豈非_下以_二其中_一命_レ之乎。中庸曰。中也者天下之大本也。和也者天下之達道也。致_二中和_一。天地位焉。萬物育焉。此理至矣。外_レ之豈更復有_二太極_一哉。以_レ極爲_レ中。則爲_レ不_レ明_レ理。以_レ極爲_レ形。乃爲_レ明_レ理乎。(陸象山全集卷二、十九頁)

陸象山の云へる所亦その理なしとせず。然るに朱子は固く前説を執りて動かす。太極の極は至極の意味にて理の極致を云へるものとし中と訓するの當らざるを説いて、

夫大傳之太極者何也。卽兩儀四象八卦之理。具於三者之先。而縉於三者之内者也。聖人之意。正以其究竟至極。無名可名。故特謂之太極。猶曰舉天下之至極。無以加此云爾。初不以其中而命之也。至如北極之極。屋極之極。皇極之極。民極之極。諸儒雖有解爲中者。蓋以此物之極。尊在此物之中。非指極字而訓之以中也。(朱子文集卷三十六、十三頁)と云ひ、又

極是名此理之至極。中是狀此理之不偏。雖然同是此理。然其名義。各有攸當。雖聖賢言之。亦未嘗敢有所差互也。若皇極之極民極之極乃爲標準之意。猶曰立於此。而示於彼。使其有所向望而取正焉耳。非以其中而命之也。立我烝民。立與粒通。卽書所謂烝民乃粒。莫匪爾極。則爾指后稷而言。蓋曰使我衆人皆得粒食。莫非爾后稷之所立者是望耳。爾字不指天地。極字亦非指所受之中。中者天下之大本。乃以喜怒哀樂之未發。此理渾然無所偏倚而言。太極固無偏倚。而爲萬化之本。然其得名自爲至極之極。而兼有標準之義。初不以中而得名也。老兄自以中訓極。熹未嘗以形訓極也。今若此言。則是已不曉文義。而謂他人亦不曉也。請更詳之。(同上卷三十六、十三頁)

と云へり。極に中の意味あることは陸象山の云へるが如し。故に漢書五行志皇極の注に應劭は皇大極中也と云ひ、又詩の毛傳にも極中也と云へり。然れども極に至極の意あることは、爾雅釋詁に極至也と云ひ、大學に君子無_レ所_レ不用_二其極_一とあるによりて明かなり。是れ些々たる一字の訓義に過ぎざれども、若し極を訓して中と爲すときは無極は無中の意となりて周濂溪が無極の二字を加へたる本意にあらざるなり。是れ朱子の固くその説を執りて動かざりし所以にして理由なしと爲さざるなり。而して前に述べたるが如く朱子が古來の傳説に従はず太極を以て一箇の理と爲したるは、是れ易傳及び太極圖説の未だ發せざるの蘊を發したるものにして、今その言を擧ぐれば左の如し。

太極只是一箇理字。(朱子語類卷一、一頁)

太極圖只是一箇實理。一以貫_レ之。(同上卷九十四、一頁)

太極理也。動靜氣也。氣行則理亦行。二者常相依。而未_二嘗相離_一也。當初元無_二一物_一。只有_二此理_一。有_二此理_一。便會_二動而生_レ陽。靜而生_レ陰。(朱子全書卷四十九、九頁)

然るに太極なる理は只是れ一箇の理にして二三あるべきものにあらざれども、之を分別して見れば(一)無極の理。(二)所以然の理。(三)生々の理。(四)絶對の理。(五)統體の理。(六)各具の理。の意味を有するものゝ如し。而して無極の理、所以然の理及び生々の理は太極の性情(或は質)を表示したるものにして、絶對の理、統體の理及び各具の理は太極の分量(或は量)を表示したるものなり。

朱子の説く所多端なりと雖も、要するに此の六箇條に外ならざるべし。

(二)無極の意。周濂溪の所謂無極而太極に就て朱子が如何なる意見を有せしかを考察するに朱子は太極圖解に於て

上天之載。無聲無臭。而實造化之樞紐。品彙之根柢也。故曰無極而太極。非太極之外。別有無極一也。

と云へり。此れに據れば無極はもと太極なる理の言語に絶し思議に絶し、聲もなく臭もなく形も象もなきもの即ち無形の極なることを形容したるものにして、易に所謂形而上者謂之道と同一の意味を道破せるなり。故に朱子は反覆之を説明して

無極而太極。只是一句。如冲漠無朕。畢竟是上面無形象。然却實有此理。(朱子語類卷九十四、一頁)
聖人謂之太極者。所以指夫天地萬物之根也。周子因之。而又謂之無極者。所以著夫無聲無臭之妙也。(同上卷九十四、二頁)

と云へり。無極とは此の如く太極の方所形状なきことを形容したるに過ぎずとすれば、太極の上は無極なる實在ありて此れよりして太極を生じたりと云ふにあらずして、只無形無象の理の存在することを意味するのみ。是れ朱子が

周子所謂無極而太極。非謂太極之上。別有無極一也。但言太極非有物耳。如云上天之

載。無_レ聲無_レ臭。故云_ニ無極之真。二五之精。既言_ニ無極。則不_ニ復別舉_ニ太極_一也。若如_ニ今說。則此處豈不_レ缺一太極字_一耶。(同上卷九十四、二頁)

無極而太極。不_ニ是太極之外。別有_ニ無極。無中自有_ニ此理。又不_レ可_下將_ニ無極。便做_中太極_上。無極而太極。此而字輕。無_ニ次第_一故也。(同上卷九十四、二頁)

と云へる所以なり。朱子の陸象山に與へたる書中に近見_ニ國史濂溪傳。載_ニ此圖說。乃云自_ニ無極。而爲_ニ太極。若使_ニ濂溪本書。實有_ニ自爲兩字。則信如_ニ老兄所_レ言。不_ニ敢辨_一矣。(文集卷三十六)とあるを見れば、當時國史の濂溪傳に自_ニ無極。而爲_ニ太極。とありて太極の上に無極なる實在の存するが如く見たりしを以て、朱子は世人の誤解を招かんことを恐れて辨明に務めたりしなり。然るに無極はもと太極の形象なきを形容したるものなることを悟り得たるものより見れば、之を無と云ふも又有と云ふも亦妨げず。朱子が

上天之載。是就_ニ有中_一說_レ無。無極而太極。是就_ニ無中_一說_レ有。若實見得。卽說_レ有說_レ無。或先或後。都無_ニ妨礙_一。(朱子文集卷三十六、十五頁)

と云へるは正に此の理を説けるものなり。周濂溪は無極而の三字を加へたる理由に至りては一も説ける所なしと雖も、その意を推せば朱子の説ける所は蓋し周濂溪の本旨を得たるものなるべし。然るに當時の學者の中には無極は絶對に物なきこと、老子の所謂無、佛教に所謂空と(老子の無佛教

の空は實在を意味すれども」と同一の意味に解するものあり。陸象山の如きその一人にして左の如く言へり。

謂。極者正以_三其究竟至極。無_三名可_レ名。故特謂_三之太極。就令_レ如_レ此。又何必更於_三上面。加_三無極字_一也。若謂_レ欲_レ言_下其無_三方所_一無_中形狀_上。則宜_レ如_下詩言_三上天之載_一。而於_三其下_一。贊_レ之曰_中無_レ聲無_レ臭可_レ也。豈宜_下以_三無極字_一。加_中之太極之上_上。老子以_レ無爲_三天地之始_一。以_レ有爲_三萬物之母_一。直將_三無字_一。搭在_三上面_一。正是老氏之學。豈可_レ諱也。(陸象山全集卷二、十九頁)

然るに老子の所謂無極と周濂溪の所謂無極とはその用語は同一なれども、その意味異なる所あるを以て之を同一視すべきものにあらず。故に朱子は之を辯明して、

老子復_三歸於無極_一。無極乃無窮之義。如_下莊生入_三無窮之門_一。以遊_中無極之野_上云爾。非_レ若_三周子所_レ言之意_一也。今乃引_レ之。而謂_三周子之言實出_三乎彼_一。此又理有_レ未_レ明。而不_レ能_レ盡_三乎人言之意_一者也。(朱子文集卷三十六、十一頁)

と云ひ、又佛説の空とも同じからざるを辯じて、

無極是有_レ理。而無_レ形。如_レ性何嘗有_レ形。太極是五行陰陽之理皆有。不_三是空底物事_一。若是空時。如_三釋氏說_レ性相似。釋氏只見_三得箇皮殼_一。裏面許多道理。他却_レ不見。(朱子語類卷九十四、二頁)

と云へり。朱子の意に従ひ無極を以て方所形状なくして理ありの意とすれば、老子の無又は無極及

び佛教の空の思想と異なる所あるは明かにして復た論するを俟たず。而して周子が太極の上に無極の字を加へたるは、朱子の説に據れば只無形無象なることを表はさんが爲めのみにあらずして、之が理なることを表象せんが爲めなりと謂ふを得べし。故に曰く

無極而太極。蓋恐人將太極。做一箇有形象底物看。故又說無極。言只是理也。(同上卷九十四、一頁)

而してかく無形の理と解するの私意に出づるにあらずして周子の意に出でたることを説いては

此非某之說。他道理自如此。着自家私意不得。太極無形象。只是理。他自有這箇道理。自家私着一字不得。(同上卷九十四、二頁)

と云へり。然れども周子にはたとひその意味あるもその言なきを以て、太極の理たることを明かにしたるの功は之を朱子に歸せざるを得ず。

以上述ぶる所を繰返して云へば、太極なる實在は一面より見れば無形無象にして言議すべからざるものなるを以て之を無極と云ふ。更に他の一面より見れば無極なる太極は宇宙及び人生の樞紐根柢となるべき理にして、宇宙と云ひ人生と云ふ皆太極より發現したるものに外ならず。蓋し太極は宇宙及び人生なる現象となりて現はるべきの理已に森然として具はりて、未だ現はれざる根本原理なるを以てなり。程子の所謂冲漠無朕。而萬象森然已具。も此の意味にして、太極はその體冲漠無朕

何等形象の見るべきものなしと雖も、絶待に空無なるにあらずしてその中に萬象森然として具備せるを見る。故に朱子も程子の言は此只是說無極而太極と云ひ、又

今人只見前面一段事無形無兆。將謂是空蕩々。却不_レ知_レ道冲漠無朕。萬象森然已具。如釋氏便只是說_レ空。老子只是說_レ無。却不_レ知_レ道莫_レ實_レ於理。(同上卷九十五、廿三頁)

と云へり。かく太極を以て冲漠無朕無形無象のものとするれば、太極は現象を超越して現象以上の存在なるが如くなれども、太極は一面より見れば萬象の根本原理にして萬象を包涵し、一面より見れば萬象の中に存在して、而も之を一貫するものなり。故に朱子は此の理を説いて

周子所_レ以_レ謂_レ無極。正_レ以_レ其無_レ方所_レ無_レ形狀。以_レ爲_レ在_レ無物之前。而未_レ嘗不_レ立_レ於有物之後。以_レ爲_レ在_レ陰陽之外。而未_レ嘗不_レ行_レ乎陰陽之中。以_レ爲_レ通_レ貫全體。無_レ乎不在。則又初無_レ聲臭影響之可言也。(朱子文集卷三十六、十頁)

と云へり。是れに據れば朱子の説は決して超越的實在論と云ふべきものにあらずして、具象的實在論と稱すべきものなることを知らざるべからず。

第四節 所以然の理

(一) 所_レ以_レ爲_レ陰陽_レ之_レ理。太極は一面より見れば無極の理なれども、他の一面より見れば所以然の理と云ふを得べし。朱子の所謂上天之載。無_レ聲無_レ臭。而實造化之樞紐。品彙之根柢なりとは此れを

謂ふなり。蓋し太極なる理は有らゆる現象の根本原理にして、現象をして現象たらしむる所以の理なるを以てなり。故に朱子は此の理を説いて

道須_下是合_二理與_レ氣看_上。理是靈底物事。無_二那氣質_一。則此理無_二安頓處_一。易說_二一陰一陽之謂_レ道_一。這便并_二理與_レ氣而言_一。蓋陰陽非_レ道。所_二以陰陽_一者道也。(朱子語類卷七十四、廿二頁)

と云へり。今太極と陰陽即ち實在と現象との關係に就て考察するに、太極なる根本原理ありて陰陽動靜の現象の生ずるものなれども、太極動いて後に陽となり靜にして後陰となるものにあらずして、太極の動そのまゝ陽にして靜そのまゝ陰なるものなり。故に朱子以爲らく、

太極動而生_レ陽。靜而生_レ陰。非_下是動而後有_レ陽。靜而後有_レ陰。截然爲_二兩段_一。先有_レ此而後有_レ彼也。只太極之動便是陽。靜便是陰。方_二其動時_一。則不_レ見_レ靜。方_二其靜時_一。則不_レ見_レ動。然動而生_レ陽。亦只是且從_レ此說起。陽動以上更有_レ在。程子所謂動靜無_レ端。陰陽無_レ始。於_レ此可_レ見。

(朱子語類卷九十四、九頁)

此れに據れば太極は陰となり陽となる所以の原理にして、その裏に陰となり陽となりて現はるべきものを包涵するを以て、それが即ち陰となり陽となりて現はるゝなり。而して陰陽は即ち太極の動靜そのまゝにして動靜以外別に陰陽あるにあらず。然るに周濂溪の所謂太極動而生_レ陽。動極而靜。靜而生_レ陰。靜極復動の説は善く觀ざれば動靜以外に陰陽の存在するが如く誤解せらるゝを免れず。

是れ朱子に太極動便是陽。靜便是陰の説ある所以にして周濂溪の説は朱子の説明を待つて始めて明かなるを得たるなり。朱子は更に太極なる根本原理より陰陽動靜の現象の生ずることを説いては、有_二太極_一則一動一靜。而兩儀分。有_二陰陽_一則一變一合。而五行具。蓋五行之變。至_二於不_レ可_レ窮。然無_レ適而非_二陰陽之道_一。至_下其所_三以爲_二陰陽_一者_上。則又無_レ適而非_二太極之本然_一也。夫豈有_レ所_二虧欠_一間隔_一哉。(周子全書卷一、十五頁)

以_レ物論_レ之。易之有_二太極_一。如_二木之有_レ根。浮屠之有_レ頂。但木之根。浮屠之頂。是有形之極。太極却不_二是一物_一。無_二方所頓放_一。是無形之極。故周子曰。無極而太極。是他說_下得有_二功夫_一處_上。太極之所_三以爲_二太極_一。却不_レ離_二乎兩儀四象八卦_一。如_二一陰一陽之謂_レ道。指_二一陰一陽_一爲_レ道則不可。而道則不_レ離_二乎陰陽_一也。(朱子語類卷九十四、廿頁)

と云へり。此れに據れば陰陽と云ひ五行と云ひ四象八卦と云ひ天地間の有らゆる現象世界は、太極なる理の顯現にして現象は太極を離れず太極は現象を離れず、現象以外別に太極あるにあらざるなり。蓋し此の關係を考察するには太極を主とする場合と陰陽を主とする場合とあり。太極を主として觀れば陰陽は太極の中に包涵せられ、陰陽を主として觀れば太極は陰陽の中に在り、此の二説は決して矛盾撞突するものにあらず。朱子此の理を説いて曰く、

如_下易有_二太極_一是生_中兩儀_上則先從_二實理處_一説。若論_二其生_一則俱生。太極依_レ舊在_二陰陽裏_一。但言_二其

次序。須_下有_二這實理_一。方始有_レ陰陽_也。其理則一。雖_レ然自_二見在事物_一而觀_レ之。則陰陽函_二太極_一。推_二其本_一。則太極生_二陰陽_一。(朱子語類卷七十五、十九頁)

某前日說。只從_二陰陽處_一看。則所_レ謂太極者。便只在_二陰陽裏_一。所_レ謂陰陽者。便只是在_二太極裏_一。而今人說_下陰陽上面。別有_二一箇無形無影底物_一是太極_也非也。(同上卷九十五、廿三頁)

故に太極を以て陰陽たる所以の根本原理なりとすれば太極は超然として陰陽以上に存在するものゝ如くなれども、朱子の本意は決して然らずして太極を主とすれば太極陰陽を涵み太極以外に陰陽なく、陰陽を主とすれば陰陽太極を包容して陰陽以外に太極なきを以て、現象即實在たると共に實在即現象と云ふを得べきなり。

(二) 所以動靜之理。蓋し陰陽は氣に屬するものにして陽は氣の活動的、陰は氣の靜止的なるを以て陽を動と爲し陰を靜と爲すを得べし。而して二者の關係をいへば陰陽は體にして動靜は用なり。故に朱子は

實與_レ動便是陽。虛與_レ靜便是陰。但虛實動靜。是言_二其用_一。陰陽剛柔。是言_二其體_一而已。(同上卷九十八、二頁)

と云へり。此の陰陽動靜の體用關係よりいへば、太極が陰陽たる所以の原理たる以上は亦動靜する所以の原理とも云ひ得べし。故に太極は陰陽そのものにあらざると共に動靜そのものにあらざして

陰陽動靜する所以の根本原理なるを以て、此れより陰陽動靜の現象を生ずるなり。もし此の原理の存することなくんば現象の生成せらるべき理なし。朱子は此の理を明かにして

天地之間。只有_二動靜兩端。循環不_レ已。更無_三餘事。此之謂_レ易。而其動其靜。則必有_下所_二以動靜

之理_上。是則所_レ謂太極也。(朱子文集卷四十五、十二頁)

と云へり。之れに據れば宇宙の現象世界を總べて云へば動靜の兩端あるのみにして、動靜の外に現象世界あるなし。然れども此の動靜は動靜する所以の原理たる太極より生ずるものにして畢竟所以然の理の發現に外ならずと謂ふべし。故に本體を主として觀れば太極は動靜する所以の理にして動靜はその中に包涵せらるゝものと云はざるべからず。然るに太極は動靜する所以の原理にして動靜そのものにあらざるの理を能く悟り得るときは、氣の動靜より推して本體の太極に溯りて太極に動靜ありと云ふも亦妨げなかるべし。故に朱子は

蓋謂_三太極幽_二動靜_一則可。(以_三本體_一而言也)謂_三太極有_二動靜_一則可。(以_三流行_一而言也)若謂_三太

極便是動靜。則是形而上下者不_レ可_レ分。而易有_二太極_一之言贅矣。(朱子文集卷四十五、十二頁)

と云へり。蓋し太極は動靜する所以の理なれば動靜の見るべきものなし。もし動靜の見るべきあれば既に現象に屬し太極なる理にあらず。然れども氣に動靜あるを見れば之を太極に歸せざるべからず。是に於て太極に動靜ありと云ふを得べし。故に朱子は此の理を明かにして云ふ。

問太極理也。理如何動靜。有_レ形則有_二動靜_一。太極無_レ形。恐不_レ可_下以_二動靜_一言_上。曰。理有_二動靜_一。故氣有_二動靜_一。若理無_二動靜_一。則氣何自而有_二動靜_一也。(朱子全書卷四十九、十四頁)

太極無_二方所_一。無_二形體_一。無_二地位可_レ頓放_一。若以_二未發_一言之。未發却是靜。動靜陰陽。皆只是形而下者。然動亦太極之動。靜亦太極之靜。但動靜非_二太極_一耳。故周子只以_二無極_一言之。(朱子語類卷九十四、五頁)

然るに太極に動靜ありと云へるは氣の動靜より推論したるものにして、其の實本體より云へば動靜する所以の理あるのみ。無形無象の本體の上に動靜あるにあらず。是れ朱子が謂_二太極有_二動靜_一則可_レ以_二流行_一而言也。と云ひ、

太極之有_二動靜_一。是天命之流行也。蓋太極者本然之妙也。動靜者所_レ乘之機也。(太極圖說解)

と云ひ又人の馬に乗るを以て之に譬へて

太極理也。動靜氣也。氣行則理亦行。二者常相依。而未_レ嘗相離_一也。太極猶_レ人。動靜猶_レ馬。馬所_レ以_レ載_レ人。人所_レ以_レ乘_レ馬。馬之一出一入。人亦與_レ之一出一入。蓋一動一靜。而太極之妙。未_レ嘗不_レ在焉。此所_レ謂所_レ乘之機。無極二五。所_レ以_レ妙合而凝_一也。(朱子語類卷九十四、十二頁)

と云ひ流行の上より説ける所以なり。而して流行は理と氣とを兼ねて云へるものにして、蓋し氣より推論するときはその本原の太極に動靜すべきものありと云ふを得べきなり。然れども此の説は流

行の上より云へるものにして本體の上より云へるものにあらざることを忘るべからず。然るに後世に至りて朱子の説は往々誤解せられたるが如し。朱子の門人黃勉齋は太極を以て動靜を會せざるものと爲し

太極動而生陽。靜而生陰。太極不_三是會_二動靜_一底物。動靜陰陽也。所以圖解云。動靜者所_レ乘之機也。所_レ乘四字最難_レ看。大抵只看_三太極乘_二著什麼機_一。乘_三着動機_二便動。乘_三着靜機_二便靜。那太極却不_三自會_二動靜_一。(性理通會卷一、二十八頁)

と云へり。太極は動靜する所以の原理にして即ち動靜をして動靜たらしむる所以の理なるを以て、其の動靜するものは氣の作用なるも能く動靜するは太極之を主宰するが故なり。朱子が人の馬に乗るに譬へたるも亦然り。馬の動靜するまゝに動靜するにあらずして、馬の動靜するは人の控御宜しきに由る。然れども馬の動靜する結果より見れば人は馬の動靜に隨つて動靜するが如く見ゆるなり。故に太極を以て動靜する能はずして氣の動靜に従つて動靜する一の無能物と爲すが如きは朱子の本旨に悖るものと云はざるべからず。朱子が

當初無_二一物_一。只有_二此理_一。有_二此理_一。便會_下動而生陽。靜而生陰。靜極復動。動極復靜。循環轉。其實無_レ窮。氣亦與_レ之無_レ窮。(朱子全書卷四十九、十頁)

と云へるを見れば其の説の謬れるを知り得べきにあらずや。而して又吳草廬は太極に動靜なきもの

として左の如く云へり。

蓋太極無_二動靜_一。動靜者氣機也。氣機一動。則太極亦動。氣機一靜。則太極亦靜。故朱子釋_二太極圖_一曰。太極之有_二動靜_一。是天命之有_二流行_一也。此是爲_二周子_一分解。太極不_レ當_レ言_二動靜_一。以_二天命之有_二流行_一。故得_下以_二動靜_一言_上也。又曰。太極者本然之妙也。動靜者所_レ乘_二之機_一也。氣動則太極亦動。氣靜則太極亦靜。太極之乘_二此氣_一。猶_二琴弦_一之乘_レ機也。故曰動靜者所_レ乘_二之機_一。謂_下其所_レ乘_二之氣機_一有_二動靜_一。而太極本然之妙無_レ動靜_上也。(吳文正公全集卷二、十一頁)

吳草廬が太極無_二動靜_一と云ひ、太極本然之妙無_二動靜_一と云へるは如何なる意味を有するか。太極はもと動靜する所以の理なるを以て太極に動靜の理なしといふべからず。唯動と爲り靜と爲りて顯現せざるのみ。是れ朱子がその門人葉賀孫のいへる太極只是理。理不_レ可_下以_二動靜_一言_上の言を是認せられたる所以なり。然れども本體よりいへば動靜する所以の理あり、流行よりいへば氣に動靜あれば太極に動靜なしと云ふべからず。吳草廬の説にして動靜の理ありて動靜の象なしの意味なりとすれば之を是認するを得べきも、文字に顯はれたるが如く全然太極に動靜なしの意とすれば是れ朱子の意を誤解したるものと云はざるべからず。故に明の薛敬軒及び我朝の室鳩巢の如き皆その説の誤を指擿せざるなし。鳩巢の説に以爲らく

太極固有_二不可_下以_二動靜_一言_上者_中。然其渾然之體。包_二括陰陽動靜之理_一。常已見成在矣。則其動也

太極之動也。其靜也太極之靜也。何以言之。陽動陰靜。先有此理。而後有氣。故氣之動而爲陽。則是因陽動之理先在而生也。氣之靜而爲陰。則是因陰靜之理先在乃生也。此朱子所謂此理便會動而生陽。靜而生陰者是也。由是言之。其爲動靜者。雖在陰陽。然其所以動靜者。有太極爲之主宰也。(太極圖述卷下、十五頁)

此の説は朱子の本旨を得たるものにして朱子が太極に動靜ありと云ふ所以の意は之に外ならずと謂ふべし。而して薛敬軒のいへる所も此の説に近きものありて左の如く云へり。

臨川吳氏曰。太極無動靜。故朱子釋太極圖曰。太極之有動靜。是天命之流行也。此是爲周子分解。太極不當言動靜。以天命有流行。故只得以下以動靜言。竊謂天命即天道也。天道非太極乎。天命既有流行。太極豈無動靜乎。朱子曰太極本然之妙也。動靜所乘之機也。是則動靜雖屬陰陽。而所以能動靜者。實太極爲之也。使太極無動靜。則爲枯槁無用物。又焉能爲造化之樞紐品彙之根柢乎。以是觀則太極能爲動靜也明矣。(讀書錄類編卷七、十七頁)

朱子が一陰一陽之謂道を解して所以一陰一陽者道也。と爲し繼之者善也を解して天命の流行と爲し乾元萬物資始。乃繼之者善也。と云ひ、繼之者善。方是天理流行之初。人物所資以始(語類七十四、二十四頁)といへる所を見れば道(即ち太極)と天命とは同一視すべからざること明かなり。然るに薛敬軒が天命即天道也。天道非太極乎。と云へるは朱子の本旨を失ふものにして、天命の流行

は理上よりのみいふべきものにあらずして氣を雜へて云ふべきものなれば、朱子が太極に有_二動靜_一と云へるは上に述べたるが如く是れ天命流行の所より太極なる本體に溯りて云へるのみ。その實太極は動靜する所以の理なれば動靜を以て云ふべからずと雖も、動靜の理なしとは謂ふべからず。是れ朱子が太極に有_二動靜_一と云へる所以なり。故に太極無_二動靜_一と云ふべからずと雖も太極有_二動靜_一と云ふも亦太極に動靜の理ありの意味に解せざるべからず。そは太極は動靜する所以の理なればなり。此の處は能く朱子の本旨を解せざるべからざる所なり。朱子は此の如く太極を以て動靜する所以の理にして而も太極に動靜ありと見たるを以て張南軒の如く太極を以て動靜を超越したる至靜なるものと爲さずして、動靜を包涵するものと爲せり。

問南軒云。太極之體至靜如何。曰不_レ是。問又云所謂至靜者。貫_三乎未發已發_一而言如何。曰如_レ此則却成_二一不正當尖斜太極_一。(朱子語類卷九十四、十一頁)

と云へるもの即ち是れなり。蓋し朱子は動は靜に對し靜は動に對する相對的のものとして動靜を超越したる至靜なるものゝ存在を認めず。故にその言ふ所を見るに

來諭謂動靜之外。別有_二不_二與_レ動對_一之靜。不_二與_レ靜對_一之動也。此則尤所_レ未_レ喻。動靜二字。相_二爲_一對待。不_レ能_二相無_一。乃天理之自然。非_三人力之所_二能爲_一也。若不_二與_レ動對_一。則不_レ名_レ靜。不_二與_レ靜對_一。則亦不_二名爲_レ動矣。(朱子文集卷四十二、二頁)

と云へり。蓋し動靜はもと現象上の氣に就ていへるものなれば、太極の如き理に就て云ふべきものにあらず。故に太極の現象以上の絶對的實在たることを表はさんとするには至靜又は至動と云ふを得べからざるにあらず。然れども至靜といへば靜に偏し至動と云へば動に偏するの嫌ありて太極なる理の一動一靜未發已發の理たることを表はすに適切なるものにあらず。故に朱子は周子の主靜の如きも靜に偏するの弊ありとして之を取らざりしなり。以上述ぶる所を概括して云へば太極なる理は陰陽動靜する所以の根本原理にしてその中に陰陽動靜を包涵するを以て、宇宙に於ける一切の現象は此れより發現したるものなりと云ふことに歸すべし。

第五節 生々の理

上文述ぶるが如く太極は無形無象の理體にして陰陽動靜する所以の根本原理なり。然るに更に太極の性情よりいへば又生々の理なると共に眞實の理と云ふを得べし。蓋し太極動いて陽となり靜にして陰となり永遠無窮に流行して己まざるは眞實の理の然らしむるものにして、陰陽動靜の分位の截然一定して移すべからざるも亦眞實の理の然らしむる所なり。故に宇宙に於ける萬事萬物はすべて眞實の理によりて存在せざるなし。今朱子の説に就て之を考察するに朱子は左の如く云へり。

問周子言「無極之眞」。却又不言「太極」如何。曰無極之眞。已該「得太極」在「其中」。眞字便是太極。

(周子全書卷二、十頁)

誠是實理。徹上徹下。只是這箇生_レ物。從_二那上_一做來。萬物流_二形天地間_一。都是那底做。(同上)

以_レ理言之。天地之間。至實而無_二一息之妄_一。故自_レ古至_レ今。無_二一物之不_レ實_一。而一物之中。自_レ始至_レ終。皆實理之所_レ爲也。(同上十一頁)

誠とは眞實無妄の理にして太極即ち眞即ち誠なれば太極の外に眞實の理あるにあらざるなり。此れ朱子が眞字便是太極なりと云ひ、天地之間。至實而無_二一息之妄_一と云へる所以なり。然るに太極は眞實無妄の理たると共に之を至善の理とも謂ふを得べし。蓋し太極を以て眞實の理と云へるは理の方面より見たるものにして至善の理と云へるは徳の方面より見たるものなるべし。而してその實は一理たるなり。朱子の言に

或問_二太極_一。曰。太極只是極好至善底道理。人々有_二一太極_一。物々有_二一太極_一。周子所_レ謂太極。是天地人物。至善至好底表徳。(朱子語類卷九十四、一頁)

とあるを見れば以て太極の徳より至善の理となせるを知るべし。蓋し太極はもと無形無象の理にして思議すべからざるものなれども、その理を明かにせんとして之を形容して或は所以然の理と云ひ或は眞實の理と云ひ至善の理と云へるなり。而して又太極が宇宙生々發展の原理なる所よりして之を生々の理とも謂ふを得べし。故に朱子は又

元者生物之始。天地之徳。莫_レ先_二於此_一。故於_レ時爲_レ春。於_レ人爲_レ仁。而衆美之長也。亨者生物之

通。物至_二於此。莫_レ不_二嘉美。故爲_レ時爲_レ夏。於_レ人爲_レ禮。而衆美之會也。利者生物之遂。物各得_レ宜。不_二相妨害。故於_レ時爲_レ秋。於_レ人則爲_レ義。而得_二其分之和。貞者生物之成。實理具備。隨_レ在各足。故於_レ時爲_レ冬。於_レ人則爲_レ智。而爲_二衆事之幹。(周易本義道卷七、一頁)

と云へり。此れに據れば元亨利貞は一面より見れば生々の理の始通遂成にして一面より見れば眞實の理の善美利正なり。而して一面より見れば人心生理の仁義禮智と云ふを得べし。

(一)生_{〇〇}の理。太極は即ち生々の理にして渾然一體なるものなれども之を分てば四箇の理と爲すを得べし。元亨利貞即ち是れなり。而して生々の理の始は元にして生々の理の通は亨、生々の理の遂は利にして生々の理の成は貞なり。生々の理の成には元となりて現はるものを藏するを以て發して元となり亨となり利貞となりて常に循環して已まず。而して元亨利貞は即ち性にして形象方所なきものなれども、始通遂成は生々の理の用にして現象的のものなれば之を認識するを得べし。故に朱子は

元亨利貞性也。生長收藏情也。以_レ元生。以_レ亨長。以_レ利收。以_レ貞藏者心也。……性者心之理也。情者性之用也。心者性情之主也。程子曰。其體則謂_二之易。其理則謂_二之道。其用謂_二之神。正謂_レ此也。又曰言_二天之自然者。謂_二之天道。言_下天之付_二與萬物者。謂_二之天命。又曰天地以_レ生_レ物爲_レ心亦謂_レ此也。(朱子文集卷六十七、一頁)

と云へり。然るに理と氣とは本來相離れずして同一體を成せること、朱子が形而上者謂之道。形而下者謂之器。道未嘗離乎器。道亦只是器之理。と云へるが如きものなれば生々の理は必ず生々の氣を通じて現はるゝこと、仁義禮智の性の現はれて惻隱羞惡辭讓是非の情となるが如し。是れ朱子の

太極陰陽五行。只持三元亨利貞。看甚好。太極是元亨利貞。都在上面。陰陽。利貞是陰。元亨是陽。五行。是元木亨是火。利是金。貞是水。(朱子語類卷九十四、十四頁)

と云へる所以なり。蓋し生々の理は陰陽の中にも存し五行の中にも存し萬化萬象の中にも存し此れによりて生々の發展を遂げざるものなし。故に生々の理は形象の見るべきものなしと雖も生々の理の氣によりて現はれ現象となれるものに就て之を見るを得べし。故に朱子が生々の現象を主として説けるも之れが爲めなるべし。その言に

元亨利貞。理也有這四段。氣也有這四段。理便在氣中。兩個不會相離。若是說時。則有那未涉於氣底四德。要就氣上看也得。所以伊川說三元者物之始。亨者物之遂。利者物之實。貞者物之成。這雖是就氣上說。然理便在其中。伊川說話改不得。謂是有氣則理便具。所以伊川只恁地說。便可見得物裏面便有這理。(朱子語類卷六十八、七頁)

とあるを見れば氣の上に就て説くも理の存在を外にしたるにあらざるを知るべし。

今生々の理の生々の氣によりて現はれたる所を見れば元は是れ生々の氣の始めて發見したる所に於て此の裏には生々の氣の通も遂も成も皆包涵せられて一も該ねざるなし。而して亨は是れ生々の氣の旺盛にして天地に充滿流通するを云ひ、利は生々の氣の發展を遂げて萬物その宜しきを得るを云ひ、貞は生々の氣の發展此に至りて完成し事理正しからざるなきを云へるものにして、之を分てば生々の氣の始通遂成となれども之を統ふれば一つの生々の氣に外ならず。而して此の生々の氣は生々の理の然らしむる所なり。故に朱子は此の意を説明して

元只是善之長。萬物生理。皆始於此。衆善百行。皆統於此。故於時爲春。亨春方生育。至此乃無一物不暢茂。咸遂其美。故於時爲夏。利者萬物至此各遂其性。事理至此無不得宜。故於時爲秋。貞者萬物至此收斂成實。事理至此無不的正。故於時爲冬。此天德之自然。(朱子語類卷六十八、二十七頁)

と云へり。而して元亨利貞四者の關係を云へば元には專言の元あり偏言の元あり。專言よりいへば元は元亨利貞の四徳を統一する原理にして元の外に元なく亨なく利貞なしと謂ふべし。故に元は元の元亨は元の亨利は元の利貞は元の貞にして一として元に統べられざるなし。然れども他の一面よりいへば元の中に元あり亨の中にも元あり利貞の中にも元あり。元の全體は元亨利貞の部分の理を包涵し、元亨利貞の部分には元の全體を包涵するものにして、此の理あるを以て宇宙の現象は生々

として流行して已ます能く發展を全うすることを得るなり。朱子が

問、四徳之元。猶五常之仁。偏言則一事。專言則包四者。曰以一身觀之。元如頭。亨便是手足。利是胷腹。貞便是那元氣所歸宿一處。故人頭亦謂之元首。今若能知得所謂元之元之元之元。利之元之元之元。上面一箇元字。便是包那四箇。下面元字。則是偏言則一事者。恁地說則太煞分明了。須要知得所謂元之元亨之元。利之元貞之元者。蓋見得此。則知得所謂只是一箇之元。到那初冬十月。便是貞之元也。只是初底意思便是。(同上卷九十五、四頁)

と云へるは此の理を説けるなり。是れ仁に專言の仁あり偏言の仁ありて專言の仁は仁義禮智の四性を包涵統一するが如く、又氣候に就ていへば春に至りて元氣始めて發生するは春の生にして夏は春の長、秋は春の成冬は春の藏なるが如きものなるべし。朱子の言に

春夏秋冬雖不同。而同出乎春。春則春之生也。夏則春之長也。秋則春之成也。冬則春之藏也。自四而兩。自兩而一。則統之有宗。會之有元矣。故曰五行一陰陽。陰陽一太極。是天地之理固然也。(朱子文集卷五十八、二十四頁)

とあるは即ち是の理を云へるなり。之を要するに分別よりいへば元亨利貞の四徳なれども之を綜ぶれば一箇の生々の理に外ならざるなり。

然るに發用上に就ていへば元亨は是れ發用流行の所にして貞は發用流行の骨子なり。故に發用流行は貞の中に包藏せられたるものゝ發展に外ならざるものと云ふを得べし。故に朱子は

如三元亨利貞。元亨是發用流行處。貞便是流行底骨子。流行箇甚麼。只是流行那貞而已。(朱子

語類卷七十四、十六頁)

仁爲四端之首。而智則能成始能成終。猶元氣雖四德之長。然元不_レ生_ニ於元。而生_ニ於貞。蓋天地之化。不_ニ翕聚_一則不_ニ能_ニ發散_一。理固然也。仁智交際之間。乃萬化之機軸。(朱子文集卷五十八、二十四頁)

と云へり。元は生々の氣の發見の始にして亨に至りて大に旺盛となりて發散し利に至りて發散したる生々の氣は稍收斂し貞に至りては生氣全く藏まりて正固となる。此の裏には復た發現すべき元氣を藏するを以て能く發現を得るものにして智の仁となるべき理を藏して能く始を成し終を成すが如し。此の點よりいへば貞は體にして元は用なりと謂ふべし。此の説は前に擧ぐる所と異なるが如しと雖も、流行の序より云ふと發用の體用より云ふとの相異のみにして其の實矛盾するものにあらず。濂溪與伊川。說復字_一差不_レ同。濂溪就歸處_一說。如云_レ利貞誠之復。誠心復_ニ其不善之動_一而已矣。皆是就歸處_一說復字。伊川就動處_一說。如三元亨利貞。濂溪就利貞上_一說復字。伊川就元字_一說復字。二說只是所_レ指地頭不_レ同。道理只一般。(周子全書卷七、六頁)

と云へるは此の理を説けるものにして、蓋し生理の流行する所より見れば元は一陽來復の處にして

元_レに始まりて貞に終ると云はざるべからず。然るに生理の體用より云へば貞の潜在内藏の中に一陽來復の兆あり元に至りて發現するものなれば貞を以て生理の本と爲さざるを得ざるなり。

(二)眞實の理。元亨利貞は一方より見れば生々の理なれども一方より見れば眞實の理にして其の實相異なるものにあらずして、只見る所の方面を異にするを以てその名を異にするのみ。而して眞實の理と生々の理とは同じく一にして二ならざるものなれども、之を分てば二と爲すを得べく更に之を分てば四と爲すを得べし。朱子曰く

太極之有動靜。是天命之流行也。所謂一陰一陽之謂道。誠者聖人之本。物之終始。而命之道也。其動也誠之通也。繼_レ之者善。萬物之所_レ資以始也。其靜也誠之復也。成_レ之者性。萬物各正_レ其性命也。(太極圖說解)

又曰く、

誠之通。是造化流行。未_レ有_レ成立之初。所謂繼_レ之者。善誠之復。是萬物已得_レ此理。而皆有_レ所_レ歸藏之時。所謂成_レ之者性。在_レ人則感而遂通者。誠之通。寂然不動者。誠之復。(朱子語類卷九十四、廿八頁)

朱子の所謂誠の通及び誠の復はもと周濂溪の所謂元亨誠之通。利貞誠之復。(通書第一)より出でたるものにして、通とは眞實の理の氣によりて顯現して流行活動することを意味し、復とは眞實の

理の氣によりて潜在内藏して外に發現せざることを意味す。而して誠の通は元亨に屬し誠の復は利貞に屬す。故に朱子は又

元亨誠之通動也。利貞誠之復靜也。元者動之端也。本乎靜。貞者靜之質也。著乎動。一動一靜循環無窮。而貞者万物之所_レ以成_レ終而成_レ始者也。(朱子文集卷六十七、十七頁)

と云へり。蓋し誠の通は易に所謂繼_レ之者善及び乾元萬物資始と同一の意味にして天命の流行を云ひ、誠の復は易に所謂成_レ之者性及び乾道變化。各正_レ性命。と同一の意味にして人物に對して性を賦與せられたるを云ふ。故に生々の氣の流行發展するは太極なる眞實の理に流行發展すべき所以の理存し、又生々の氣の潜在内藏して靜的となるは眞實の理に潜在内藏すべき所以の理の存するに由るものにして、復は體通は用なり。而して流行發展の通は潜在内藏の復を離れず、潜在内藏の復は流行發展の通を離れず。之を分ては通と復との二と爲すを得れども、之を綜合すれば一氣の作用に過ぎず。而も一氣は眞實の理の顯現したるものなり。故に朱子の言に曰く。

元者用之端。而亨利貞之理具焉。至_レ於爲_レ亨爲_レ利爲_レ貞。則亦元之爲耳。此元之所_レ以包_レ四德也。若分而言_レ之。則元亨誠之通。利貞誠之復。其體用固有_レ在矣。以_レ用言則元爲_レ主。以_レ體言則貞爲_レ主。(朱子文集卷四十四、十九頁)

眞實の理は之を分てば誠之通と誠の復と爲すを得るものなれども、更に之を分てば元亨利貞の四徳

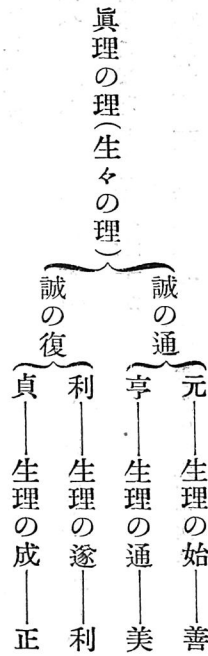
と爲すを得べく而して元は善亨は美利は利貞は正にして之を統一包容するものは即ち元なり。蓋し元は眞實の理たること共に至善の理なること上文に述ぶるが如くにして此の元は他のすべての徳を包涵する原理なり。故に宇宙の萬事萬物一々その趣を異にしながら各事物の善とする所と他の事物の善とする所と相融合して毫も矛盾衝突する所なきは是に美の存する所にして亨なり。而して美は善より生ずるものなり又萬事萬物並び立つてその性行を全うするに當りて彼我衝突する所なくしてその宜しきを得るは利にして利はもと善より生ずるものなり。次ぎに貞は利により出づるものにして萬物萬事各その生々を遂げて全く完成の域に至るを云ふ。かく事物完成の域に達すれば靜的となり實理具備しながら未だ動的とならず歸藏の状態に在るを以て之を名づけて正の理と云ふ。朱子此の理を説いて云ふ。

元亨利貞皆善也。而元爲_二四者之長_一。是善端初發見處也。亨者嘉之會亨是萬物亨通。到_二此界分_一。無_二一物不_レ美_一。便是嘉之會。利者義之和。義是箇有_二界分斷制_一底物事。疑_二於不_レ和_一。然使_下物各得_二其分_一不_レ侵越_上。乃所_二以爲_レ和也。貞正也。知_二其正之所_レ在。固守而不_レ去。故萬事依_レ此而立。

(朱子語類卷六十八、廿二頁)

之を要するに眞實の理は之を分てば誠の通と誠の復の二となり、更に之を分てば善美利正の四徳となり、之を總ふれば眞實の一理に歸すべく、而して生々の理よりいへば之を分てば生理の通と生理

の復の二となり、更に之を分てば生理の始通遂成の四徳となり、之を總ふれば生々の理の一に歸すべし。而も眞實の理と生々の理とは二箇の理にあらざして一箇の理に就てその見る所を異にするより名を異にするのみ。随つて生理の始通遂成も實理の善美利正も亦一は生々の理の流行より見ると一は實理の價值より見るとによりてその名を異にするのみにして、其の實同一の理なりと謂ふべし。



宇宙の生々の理の元亨利貞は人物に與へられて仁義禮智の性となり、仁義禮智を價值の上より云へば又美善利正となる。而して仁義禮智の四性を統一するものは仁にして、善美利正の四徳を統一するものは至善の理なり。此のことは人生問題に屬するものなれば後に至りて詳論する所あるべし。

第六節 統體の理

太極なる理を量の上より見れば之を分ちて、(一)絶對唯一の理。(二)統體の理。(三)各具の理の三となすを得べし。然れども是れも一箇の理を強ひて分析したるものなれば、その間に相關聯する所あるは言を俟たざるなり。

(一) 絶待の理。太極なる實在は宇宙萬有を統一する全體の理にして而も最高至上の理なるを以て之に對立すべきものもあることなし。故に之を稱して絶待の理と云ふを得べく、而して此の如き絶待の存在は唯一あるのみにして二三あるべきものにあらざるを以て又之を稱して唯一の理とも云ふを得べし。蓋し現象界に屬するものは一として相對的ならざるものなく、かの動靜と云ひ屈伸消長と云ひ前後上下と云ふが如き皆相對的なることは朱子が

蓋對者或以_三左右。或以_三上下。或以_三前後。或以_三多寡。或以_レ類而對。或以_レ反而對。反覆推_レ之。天地之間。眞無_三一物兀然無對而孤立者。此程子所_三以中夜以思。不_レ覺_三手舞而足蹈_一也。(朱子文集卷四十二、九頁)

と云へるが如し。然るに太極のみは宇宙の根本原理なるを以て唯一絶待にして之れに對するもの一もあることなし。是れ朱子が

太極只是箇一而無_二對者。(朱子全書卷四十九、十四頁)

大抵天下事物之理。亭當均平。無_二無對者。唯道爲_レ無對。(朱子文集卷四十二、九頁)

と云へる所以なり。蓋し一と云へば二三の如き相對するものあるが如くなれども、此の一は何物も之れに相對するものなき一なり。故に朱子は亦左の如く云へり。

自_三太極_二至_三萬物化生_一。只是一箇道理包括。非_三是先有_レ此而後有_レ彼。但統是一箇大原。自_レ體而

達用。從微而至著。(朱子語類卷九十四、八頁)

自其本_二以緣_レ末。則五行之異。本_二二氣之實。二氣之實。又本_一一理之極。是合_三萬物_一而言_レ之。爲_二一太極_一而已也。自其本_二而之_レ末。則一理之實。而萬物分_レ之以爲_レ體。故萬物之中。各有_二一太極_一。而小大之物。莫_レ不_三各有_二一定之分_一也。(周子全書卷三、二頁)

此れに據れば本體よりいへば太極なる一理分れて萬物となり、現象よりいへば萬理は太極なる一理に歸すべし。更にいへば一理は即ち統體の一太極にして萬理は一物各具の一太極なり。此れを以て之れを見れば統體の理と云ふも唯一の理と云ひ絶待の理と云ふも其の實は一なり。而して太極なる實在を稱して一理と云ひ絶待と云ふはもとその體の一にして二ならざると相待的ならざるとを表示するものなれども、吾人の言語はもと不完全を以てその實言語を以てしては到底形容すべからざるものあり。故に朱子は此れに就て

就_レ一言之。一中又有_レ對。且如_二眼前一物_一。便有_レ背有_レ面。有_レ上有_レ下。有_レ內有_レ外。二又各自爲_レ對。雖_レ說_レ無_レ對必有_レ對。且如_二碁盤路_一。兩々相對。末梢上空_二一路_一。若_レ似_レ無_レ對。然此一路對_二了三百六十路_一。此所謂一對_レ萬。道對_レ器也。(朱子語類卷九十五、廿二頁)

と云へり。吾人の如き現象世界の中に在るものに於いては到底此の矛盾を免るべからず。形而上の道と云へば本體絶對の理なることを表はしたるものなれども形而下の器と相對せざるを得ざること

なり。絶待のものが忽ち相對となる傾向を有するが如きは是れなり。是れ朱子がその不完全なることを知りながら一理又は無_レ對の言を以て太極の量の唯一全體なるを表示せし所以なり。

(二)統體の理。蓋し太極なる理は一面より見れば宇宙全體を統一する根本原理なれども、他の一面より見れば部分の現象の中にも存する原理なるを以て、前者を稱して統體の理と云ひ、後者を稱して各具の理と云ふ。今の語を以ていへば一は全體の理にして一は部分の理なり。而して、前者は本體上より觀たるものにして後者は現象上より觀たるものなることを知らざるべからず。朱子の言に蓋合而言_レ之。萬物統_二體一太極_一也。分而言_レ之。一物各具_二一太極_一也。所謂天下無_二性外之物_一。而性無_レ不在者。於_レ是可見_二其全_一矣。(太極圖說解)

とあるは即ち此の理を説けるなり。此れに據れば本體上よりいへば太極は宇宙の森羅萬象を統一する原理にして、宇宙の現象は一として太極の顯現にあらざるなし。即ち太極なる全體の理の動靜して陰陽となり五行となり萬化萬象となるものにして、所謂天下性外の物なしとは此れを謂ふなり。而して更に現象上より云へば太極既に陰陽となり五行となり萬化萬象となれば太極は陰陽の中にも存し五行の中にも存し萬化萬象の中にも存し一物として太極の具はりて其の主宰するとならざるものあることなし。所謂性在らざるなしとは此れを謂ふなり。而して朱子が此_レこに所謂性とは即ち太極を指したるものにして人生に於ける性を謂ふにあらず。然れども宇宙に於ける太極と人生に於

ける性とはも同一體なるを以て又之を性と謂ふを得べし。蓋し萬物を合せていへば渾然たる全體統べざる所なく、一物に分ちていへば一理万殊にして遍在せざる所なきものにして、此の二種の考察は太極を觀るに闕くべからざる所なり。今朱子の所謂統體の理のみに就て考察するに太極は所謂萬理の總名にして、部分的所以然の理の統一全體の理たるは論を俟たず、かの當然の理必然の理自然の理の如き現象の理も悉く之に統一せられざるなし。故に朱子は此の理を説いて

問太極便是人心之至理。曰事々物々。皆有箇極。是道理之極至。或曰如君之仁臣之敬便是極。曰。此是一事一物之極。總天地萬物之理。便是太極。太極本無此名。只是箇表德。(朱子語類卷九十四、十二頁)

太極云者。合天地萬物之理。而一名之耳。以下其無器與形。而天地萬物之理。無不在是。故曰無極而太極。以下其具天地萬物之理。而無器與形。故曰太極本無極也。(朱子文集七十八、廿頁)

と云へり。此れに由りて之を觀れば太極全體の理は萬物に具有する各部分の理を統一する原理にして、各部分の理は全體の理を離れて別に存するものにあらず。又全體の理も部分の理を離れて別に存するものにあらずなり。又太極は此の如く全體の理なれば前に述べたるが如く現象上の理もその中に包容統一せらる。そは現象の理は用にして全體の理は體なるを以てなり。朱子が

蓋所謂性者。無一理之不具。故所謂道者不待外求。而無所不備。所謂性者。無一物之

不_レ得。故道者不_レ假_二人爲_一。而無_レ所_レ不_レ周。雖_下鳥獸草木之生。僅得_二形氣之偏_一。而不_レ能_レ有_二以通_二貫乎全體_一。然其知覺運動。榮枯開落。亦皆循_二其理_一。而各有_二自然之理_一焉。(中庸或問、七頁)

と云へるは即ち此の理を述べたるものにして此れは道即ち所當然の理の性即ち所以然の理(全體の理)に具はれることを説けるものなれども、之を以て宇宙の理に推すも亦異ならざるなり。

更に部分の理に就て考察するに太極は上に述ぶるが如く全體の理なると共に部分の理なり。故に宇宙間の萬物は一として此の太極なる理を稟けてその本體と爲さざるものなし。陰陽の中にも此の理具はり五行の中にも此の理具はり、その他草木の如き禽獸蟲魚の如き亦皆同じく此の理具はる。殊に吾人に在りては太極全體の理を得てその性と爲す。此れ程朱が性即理也と云へる所以なり。此の點より云へば太極全體の理は部分的事物(即ち現象)の中に具はりて部分的存在を爲せるものと謂はざるべからず。朱子が

五行之生。隨_二其氣質_一。而所_レ稟不_レ同。所_レ謂各_一其性_二也。各_一其性。則渾然太極之全體。無_レ不_二各具_二於一物之中_一。而性之無_レ所_レ不_レ在。又可_レ見矣。(太極圖說解)

周子謂五殊二實。二本則一。一實萬分。萬一各正。大小有_レ定。自_レ下推而上去。五行只是二氣。二氣又只是一理。自_レ上推而下來。只是此一箇理。萬物分_レ之以爲_レ體。萬物之中。又各具_二一理_一。

所謂乾道變化。各正_二性命_一。然總又只是一箇理。此理處々皆渾淪。如_二一粒粟_一。生爲_レ苗。苗便生

花。花便結實。又成粟。還復本形。一穗有三百粒。每粒箇々完全。又將這這百粒去種。又各成三百粒。生々只管不已。初間只是這一粒分去。物々各有理。總只是一箇理。(朱子語類卷九十四、十頁)
と云へるは即ちこの理を説けるなり。此の如く本體よりいへば太極の理はすべての部分的理を包容統一する全體の理なれども、現象よりいへば太極の理は各現象の中に存して物々の本體を爲す。是れ朱子が陰陽五行萬象の中に一太極を具へて性在らざる所なしといへる所以なり。故に云ふ。

太極非是別爲一物。即陰陽而在陰陽。即五行而在五行。即萬物而在萬物。只是一箇理而已。因其極至。故名曰太極。(同上卷九十四、七頁)

太極只是天地萬物之理。在天地一言。則天地之中有太極。在萬物一言。則萬物中。各有太極。未有一天地之先。畢竟先有此理。(同上卷一、一頁)

程子が一草一木。亦皆有理と云へるも亦同一の意味に外ならず。之を總ふるに太極は現象の上にと共に現象の中に在り、而して之を貫くものは太極なりと謂ふを得べし。

最後に統體の理と各具の理との關係を云へば上に述べたるが如く、本體上より見ると現象上より見るとよりて一を統體の理と爲し一を各具の理と爲すも二個の理ありと謂ふにあらず。蓋し全體の理の外に部分の理なく又部分の理の外に全體の理なくして理は只一のみ。故に全體の理の中に部分の理を含み部分の理の中に全體の理を含む。此れを以ていへば本體上より見るときは一理あるの

みなれども、現象上より見るときは一理分れて萬殊となるべし。蓋し全體の理は合看より云ひ部分の理は離看より云へるものにして、合看すれば渾然たる一理統べざる所なく、離看すれば一理の分殊在らざる所なきなり。之を譬ふれば太極全體の理は天上一輪の月の如く、部分の理は萬川に映する箇々の月の如し、天上一輪の月の中に箇々の月を含み、萬川に映する箇々の月は天上一輪の月を涵れ、一輪の月は箇々の月を離れず、箇々の月は一輪の月を離れざるは、是れ全體の理と部分の理との關係に譬ふべし。朱子が

問ニ理與氣。曰伊川說得好。曰理一分殊。合ニ天地萬理ニ而言。只是一箇理。及ニ在ニ人。則又各自有ニ一箇理。(朱子語類卷一、二頁)

問一理之實。而萬物分レ之以爲體。故萬物各具ニ一太極。如レ此說則太極有ニ分裂ニ乎。曰本只一太極。而萬物有ニ稟受。又各自各具ニ一太極爾。如ニ月在ニ天。只一而已。及ニ散在ニ江湖。則隨處而見。不可レ謂ニ月分ニ也。(同上卷五十四、四十五頁)

と云へるは即ち是れなり。朱子の門人陳北溪は朱子の思想を承け能く其の理を説き得て遺憾なきを以て并せてこゝに引用して以て朱子の説を理解するの資と爲すべし。その言に曰く

總而言之。只是渾淪一箇理。亦只是太極。分而言之。則天地萬物各具ニ此理。亦各有ニ一太極。又都渾淪無ニ欠缺處。自ニ其分ニ而言。便成ニ許多道理。若就ニ萬物上總論。則萬物統體渾淪。又只

是一箇太極。譬如一大塊水銀。恁地圓。散而爲萬箇小塊。也箇々皆圓。合萬箇小塊。復爲一大塊。依舊又恁地圓。陳幾叟月落萬川。處々皆圓之譬。亦此如之。此太極所以下以立乎天地萬物之表。而行乎天地萬物之中。在萬古無極之前。而貫於萬古無極之後。自萬古而上。極萬古而下。大抵又只是渾淪一箇理。總爲一太極耳。此理流行。處々皆圓。無少缺欠。纔有一處缺欠。便偏了。不得謂之太極。太極本體本自圓也。(性理字義卷下、九頁)

然るに此の全體の理と部分の理との關係は天地の覆載日月四時の運行、萬事萬物の並育並行して而も相害せず相悖らざる所謂宇宙の現象の上にも認むるを得べし。中庸に此の理を説いて

辟如天地之無不持載。無不覆幬。辟如四時之錯行。如日月之代明。萬物並育而不相害。道並行不相悖。小德川流。大德敦化。此天地之所以爲大也。(中庸第三十章)

と云へり。而して朱子の解する所に從へば此れ等の現象に就て見るに天地の覆載する所以の理は太極全體の理にして、四時の錯行日月の代明する所以の理は太極部分の理なり。而して並育並行する所以の理は同じく全體の理。不害不悖所以の理は部分の理。大徳の敦化は全體の理、小徳の川流は部分の理なり。故にその言に云ふ。

所以不害不悖者。小徳之川流。所以並育並行者。大徳之敦化。小徳者全體之分。大徳者萬殊之本。(中庸章句第三十章)

中庸如_下天之無_レ不_レ覆_レ憐。地之無_レ不_レ持_レ載。正是一箇大底。包_ニ在中間。又有_ニ四時錯行。日月代明。自有_ニ細小去處。道並行而不_レ相悖。萬物並育。而不_レ相害。並行並育。便是那天地覆_レ憐。不_レ相悖。不_レ相害。便是那錯行代明底。小德川流。是說_ニ小細底。大德敦化。是那大底。大底包_ニ小底。小底分_ニ大底。千五百年間。不_レ知_ニ人如何讀_ニ這箇。都似_レ不_レ理_ニ會_ニ這道理。(朱子語類卷九十四、四十五頁)

蓋し天地の覆_レ憐並育並行より云へば宇宙の萬物一として太極の理の統一主宰する所にあらざるものなきを以て、所謂萬物統體の一太極にして所謂大徳の敦化なりといふべく、而して大徳とは太極全體の理を指す。然るに更に四時の錯行日月の代明して而も不_レ害不_レ悖より云へば、同じく太極の部分の理の主宰するによりて行はるゝを以て所謂一物各具の一太極にして所謂小徳の川流なりといふべし。而して小徳とは部分の理を指す。但覆_レ憐並育並行するもの即ち大徳の敦化にあらず。覆_レ憐並育並行する所以のもの大徳の敦化にして太極全體の理なり。又錯行代明不_レ害不_レ悖もの即ち小徳の川流にあらず。錯行代明不_レ害不_レ悖所以のもの小徳の川流にして太極部分の理の存する所なり。此れに由りて之を觀れば太極は全體の理なると共に部分の理なることは絮説を須_レらずして明かなり。而して前節に於て述べたる所以然の理は宇宙一切の現象の太極なる根本原理より發現する次第を説けるものにして、即ち生成の原理と現象との關係を觀たるのみなれども、此れは太極なる理の存在關係を觀たるものなるを以て、その間に自ら異なる所あるを知らざるべからず。